

ディレクター日誌（活動・子どもたちの様子）

期 日：令和4年7月23日（土）～令和4年7月30日（土）【7泊8日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家周辺（山口市阿東）

参加者：県内の小学5・6年生（男子11名、女子12名）

令和4年7月23日（土） 1日目 出会いの日（ふれあい体験） 自然の家→方丈原

【開会式・ダブルシャッフル・バックパッキング・ミーティング】

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染対策を講じた上でのチャレンジプログラムがスタートした。今年度は、開催前に感染者が大幅に増えたことも影響し、キャンセルが1名発生したが、無事にスタートの日を迎えることができ、23名の子どもたちが十種ヶ峰に集った。今日から4班に分かれて、それぞれのドラマが始まる。

ディレクターとして、「ドキドキしている人もきつというだろうけど、大丈夫。側にいる仲間が力になってくれる。『歩く』という字は、少し止まるという字から成り立っている。歩き疲れたら立ち止まっていいので、一步一步歩きながら、いろんなことを考え、発見し、気付くチャレンジを思いっきりしてほしい。今年のチャレンジプログラムのテーマは『繋ぐ』。班の仲間とスタッフとしっかり心をつないで、素敵な8日間になることを願っている。」というエールを送った。



これからの8日間で、子どもたちはどんな体験をし、どんな学びを得て、どんな表情で十種ヶ峰に戻ってくるのか、とても楽しみである。

ダブルシャッフルでは、8日間のキャンプで必要となる装備をそろえていく。持ってきた服、水と食料、調理器具、宿泊に必要な寝袋などを大きなザックに詰め込んでいく。体育館では、広げた物品を簡単に確認することができるが、山に入るとそうはいかない。ちょっとした油断が装備の紛失につながり、班全体に大きな影響を与えてしまう。最初にバックパッキングの基本をしっかりと学ぶことが重要である。

全ての荷物をザックに詰め込むと、信じられない重さになる。一人では抱え上げられないぐらいのその重さに多くの子がびっくりするが、仲間と支え合って、ザックを背負っていく。このあたりから、お互いに協力することへの意識が芽生えてくる。



「重さの違う荷物をこの先どう分担していくのか」も、班にとっては大きなテーマとなる。平等とは何か、全員が同じ重さを持つのではなく、班がチームとして一番力を発揮できる在り方を話し合うのも、このプログラムの仕掛けの一つである。



今日の目的地は方丈原である。最初に4班が14時30分に体育館を出発。自転車の調整のため準備に時間のかかった3班も15時55分には体育館を出発した。どの班も大きくストップすることなく、30分程度で目的地の方丈原に到着した。始めはゆっくり歩く、休憩は20分程度ごと、水はこまめに口に含む等、山を歩くスキルを体験しながら学んでいく。また、地図の見方、コンパスの使い方も大切なスキルである。ファイナルツアーで、自分たちの力だけで歩けるよう、必要なスキルを一つ一つしっかりと身に付けていく。

テン場（宿泊地）に着いてからはテント設営の仕方やトイレトレーニングをする。電気のない山の中では、少しでも明るいうちにできることを済ませなくてはならない。今夜のメニューはマカロニシチュ



一。ガスストーブを使った調理を学び、自分たちの力で初めての夕食を作った。疲れた体に温かさと程よい塩分が染みわたり、明日へのエネルギーをチャージできたようだ。

夕食後のミーティングでは1日の活動を振り返りつつ、キャンプに来た動機や8日間を通しての個人やグループの目標等について話し合った。とはいえ、まだ初日。自分の考えを十分に表現できない子もいたようである。これから、1日1日と班のメンバーで様々な経験を積み重ねる中で、自分の思いをしっかりと伝え合える関係をめざす。

今回のキャンプは、新型コロナウイルス感染対策の一環として、一人一つのテントで就寝する。側に仲間がいることは分かっているにしても、一人きりの夜に不安を感じ、帰りたいとこぼした子もいたようである。

令和4年7月24日(日)	2日目	旅立ちの日(協力の体験)	方丈原→神角神社
【バックパッキング・ミーティング】			

2日目の始まり。夜明けとともに起き、日の出とともに出発して、明るいうちにテント場について食事を済ませるといのが山での掟である。そのため普段の生活より起床時間は早い。全ての班が5時に起床し、テントの片づけ、朝食、パッキングと出発の準備を進めていく。慣れない作業に戸惑う子も多く、一つ一つに時間がかかるが、みんなで確認しながらしっかりと準備をすることが大切である。一つの紛失物が班の歩みを大きく止める原因となるからである。



7時出発という目標は達成できなかったが、8時にまず2班が出発。他の班も次々に出発し、8時半過ぎには全ての班が出発することができた。今日の目的地は神角神社。ディップ(川での水浴び)を楽しみに、テント場への早めの到着をめざす。途中、山道に入ると、背の高さほどもある藪をかき分けて進まなければならない。初めての経験に戸惑う子もいるが、ぐんぐんと歩を進めていく。



10時50分にまず2班が神角神社に到着。達成感に満ちた子どもたちの明るい声が響き渡る。他の班も続々と到着する中、4班は途中でアクシデントが発生。大事な装備であるコンパスが割れてしまい、さらに班の一人の靴がソールから剥がれてしまったのだ。しかし、どう困っているのか、どうしたいのか、子どもたちからの意思表示は乏しい。すかさず班のスタッフが子どもたちを止め、起こっている問題と一人ひとりがどう考えているのかをみんなで共有していく。夜だけでなく、班の状態に合わせて必要なミーティングを行っていくことで、チームを作っていくのだ。

13時までには全ての班がテント場に到着した。テントやタープの設営も2回目ということもあり、少しずつ自分たちの力で進めていく。途中、強風にあおられてテントやタープが飛ばされそうになるアクシデントも発生したが、荷物で押さえたり、ペグを打ち込んだりと、状況に合わせて工夫する術も学んでいく。

一段落したら、いよいよお待ちかねのディップだ。水着に着替えて、川へレッツゴー。驚くほど冷たい山の水が、疲れた体を冷やしていく。1日の疲れが吹き飛ばす程の気持ちよさがディップの魅力だ。歓声を上げながら、思う存分水浴びを満喫することで、仲間との距離も一層縮まっていく。頑張った後のご褒美として、今後の行程でも原動力になりそうだ。



夕食の雑炊を挟んで、それぞれの班でミーティングを行った。今日は、テン場への到着が早かったので、じっくりと時間が取れたようである。歩いてきた行程を振り返って、最も気分が上がったところ（ハイポイント）と下がったところ（ローポイント）などを、一人ひとりが伝えていく。多くの子はディップをハイポイントに選び、荷物の重さや藪をかき分けて進む山道をローポイントに選んでいたようである。ローの状態をどうしたら楽しめるか、発想を変えて、様々にアイデアを出し合う。

班によっては、うまくみんなの輪に溶け込めないと感じている子がいたり、疲れが先立ってしまい誰も声を発さない状態が続いたり、それぞれに課題がはっきりしたようである。自分たちの班の状態を見つめ、客観的に課題を把握し、これからどんな目標に向かっていくのか。自分たちのグループを高めていくために一人ひとりが真剣に考え、話し合うことが求められる。初日のミーティングに比べると、少しずつ自分の考えを話せる子が増えており、少しグループとしての成長を感じたミーティングになったようである。

明日は、前半の山場。初めての急登に長い山道。試練の1日である。行程の中で、子どもたちが何を感じ、何を考え、どうぶつかり合って成長していくのか、楽しみな日でもある。



令和4年7月25日(月)

3日目

発見の日(探求の意欲)

神角神社→上宇津根

【バックパッキング・ミーティング】

3日目。深夜2時半に局地的な大雨に見舞われた。大雨警報につながるような雨であれば、その後の避難等も考えていかななくてはならない。情報収集に当たりつつ、しばらくの間空を見守った。

子どもたちの様子はどうか。テントを叩きつける雨音で目を覚ました子もいたようだが、20分程度で雨が止んだため、安心して再び眠りについていたようである。

この日は、曇り時々雨。朝のパッキング中にも雨がパラつくことがあり、このキャンプに来て初めて合羽を着ることになる。どんな状態で合羽を使うのか、この判断もトレーニングの一つとなる。ファイナルツアーではイントラの指示なしに、自分たちで判断して合羽を着る必要があるからだ。雨の中のパッキングに戸惑いつつも、8時から8時半の間に全班が出発することができた。「がんばるぞー、オー！」の元気な掛け声とともに一步を踏み出す。

今日はキャンプ前半の山場。最も過酷な道のりとなる予定である。神角神社を出発したら、林道を上がり、途中、急登の尾根に取り付いて作業小屋につながる林道をめざす。初めて歩く、急な登り坂と、藪を手でかき分けて進む道なき道に悪戦苦闘しながらも、何とか進む。心が折れかけるのを、仲間同士励まし合いながら一步一步歩みを進める。作業小屋周辺で束の間の昼食タイム。ここでのエネルギー補給が後半戦に向けて重要になる。



作業小屋を抜けたら、さらに林道が続く。大きくU字にカーブする地点に差し掛かったら、県境に取り付き、上宇津根をめざす。体の疲れもピークに達した最後に、急な下り坂が待っている。滑りそうになる足元に注意しつつ、周りの木々を掴みながら、みんなで安全に下り切ることができた。

どの班もヘトヘトになりながらも、やり切った顔でテン場にたどり着いた。困難を乗り越えたものだけができる顔である。疲れた体に温かいオートミールをかき込み、疲れ



を癒す。

この日のミーティングでは、長い道のりを振り返って、一人ひとりの心の動きがどう移り変わったのかや、直面した問題に対してどう取り組んだのかななどを、みんなで話し合った。

1班は心の模様を天気にならしたようだ。気持ちが小雨の状態から土砂降りの状態になると「助けて」が言えなくなる。だからこそ、小雨の内から声を出すこと、土砂降りになっている仲間に気付くこと等を次の日に心掛けることを確認した。

2班は、朝決めたことができなかつたようだ。「大丈夫」とは口に出すけれど、本当は大丈夫ではないことも多々見られたため、本当の「大丈夫」って何だろう、「大丈夫」と言って結局チームのみんなの足を止めることにつながることもあるのだから、自分の弱音をちゃんと伝えることでチームに貢献しようということを話し合った。

3班は、前半の急登で全員のモチベーションが大きく下がったようである。同じ辛い状況にあっても、声を掛け合うことなく黙々と歩くのと、後半声を掛け合って歩いた時の気持ちに焦点を当て、どちらが楽しかったのか子どもたちに問うた。辛い時にこそ、声を出すことで楽しくなることを実感していたようである。また、常にスタッフの目がある中で、子どもたちが自由に会話をする時間が少ないこともあり、イントラは敢えて引いて、子どもたち同士の会話を促す仕掛けも取り入れていた。

4班は、作業小屋にたどり着くまでは、会話も少なく、辛さゆえに泣きながら進む子もいた。しかし後半は、気持ちを切り替え、大声を出して笑い合う場面を作ることができたようだ。その体験を想起させることで、人と話すことが苦手だという子が多い班であったが、少しずつ自分の思いを話し始める場面が見られるようになった。



令和4年7月26日(火)

4日目

挑戦の日(困難の克服)

1、2：上宇津根→福谷

3班：上宇津根⇄ロック

4班：上宇津根→船方農場

【バックパッキング・ロッククライミング・ミーティング・ソロ】

4日目。晴れ時々曇り。8日間のプログラムの折り返し地点である。トレーニングフェーズと呼ばれる最初の3日間を終え、今日からはエクスペディションフェーズに移行する。今までにない様々な体験を通して、グループ内に強い信頼関係が生まれ始める一方で、グループ内で衝突が発生しやすい時期でもある。インストラクターは、行動の決定の多くを参加者に任せ始め、非指示的なさりげない支援を行う。子どもたちは、行程の進め方やテントの設営・撤収なども徐々に自分たちの判断で行っていくようになる。また、ファイナルツアーに向けて、グループを作っていく期間でもある。

朝、前日の過酷な道のりの影響からか、子どもたちの疲れもピークに達し、動き出しが鈍い。テントの撤収、朝食、パッキングといつもの準備がなかなか進まない。インストラクターは介入すべきかどうか考えながら、必要最低限の介入をしていく。

今日は班によって目的地が異なる。それぞれの班が自分たちの選んだルートを目標に向かって進んでいくことになる。



最初に、4班が7:55に出発する。4班は福谷に向かい、ディップをしたのち、山の鞍部を越えて、船方農場でソロを行う予定だ。続いて、8:45に3班が出発。3班はマウンテンバイクでロックサイトに向かいロッククライミングを行う。その後、上宇津根に戻り、ソロに入る予定だ。1、2班は福谷に向かい、ディップをしたのち、ソロに入る。

1班は、スタッフが指示や手助けをするのを極力控え、子どもたちが自分たちで決めて、自分たちで進んでいくことを見守ると決めたようである。出発した後、早速道に迷ってしまい、スタートの場所まで引き返すことになった。道を見失ったときにむやみに進むと、さらに状況が悪化してしまう。まずは分かるところまで引き返すことが、山でも鉄則である。通常1時間の道のりに3時間をかけてしまったが、今後につながる大切な学びを得たようである。

3班は順調にマウンテンバイクを走らせ、ロックサイトまでたどり着いた。ハーネスやヘルメットを身に付け、いざ、岩場へ。必要な役割と器具の操作の仕方を学んだ後、一人ずつロッククライミングにチャレンジしていく。ロッククライミングは1人のチャレンジではない。ロープを直接支えるビレイヤー。ビレイヤーの補助をするセカンドビレイヤー。ロープが絡まないように処理をするロープマネージャー。ビレイヤーがチャレンジャーとの体重差で浮き上がらないように支えるアンカー。全てが大切な役割で、全員で1人のチャレンジをサポートしていく。1人が登るのではなく、いかにみんなで登る意識をもてるかが、ロッククライミングのチームづくりの鍵となる。

子どもたちの中には高いところが平気な子もいれば、苦手な子もいる。しかし、苦手な子が岩場で止まってしまった時こそ、チームの力が試される。手や足をかけられる位置を具体的に教えてあげる子や力強い声で応援する子、チャレンジャーのタイミングに合わせて力強くロープを引っ張る子など、みんなが一丸となって1人のチャレンジを後押しする。そうして、目標地点までたどり着いた時の達成感は、言葉では言い表せないほど素晴らしい。3班にとっては、とても有意義なロッククライミングになったようである。



途中、4班の子が熱中症と見られる症状でストップする。しっかり休んだ後、下りてきたときの顔は元気そうで、みんなでテン場である船方農場に向かっていったが、経過観察が必要である。

全ての班が無事にテン場にたどり着いた。今日はソロである。ソロはそれまでの「動」に対して「静」のプログラムである。子どもたちにとって、疲れた体と心を休める時間であるとともに、「自分」や「他人」、「それまでの出来事」を見つめ、自分を振り返る貴重な時間である。子どもたちはここで、保護者の方からの手紙をイントラから受け取る。家族からの手紙を読んだり、班によってはその手紙に返事を書いたり、これまでの自分を振り返って日記を書いたり各自が思い思いの時間を過ごした。ソロに入ると、明朝まで話がしたくても1人で黙って過ごさなくてはならない。

今年度は例年のようなツェルトによるソロではなく、テントでのソロのため、ストレスも少なく、ゆっくり休んだり、考えたりできたようである。

令和4年7月27日(水)

5日目

思索の日(克己と反省)

1、2班: 福谷⇄ロック→福谷奥

3班: 上宇津根→福谷奥

4班: 船方農場→ロック→福谷奥

【バックパッキング・ロッククライミング・ミーティング】

5日目を迎えた。今日も晴れ時々曇り。夕立と熱中症への警戒は必要なものの、天候に恵まれた1日となりそうだ。昨日ロッククライミングをした3班は昼前までソロ。その他の3つの班はロッククライミングに取り組む予定だ。

福谷に宿泊していた2班は、朝の準備もテキパキと済ませ、7時頃にはロックサイトに向かって出発した。班で声を掛け合って、元気なスタートである。少し遅れて、1班もロックサイトに向かう。

一方、船方農場に宿泊した4班のメンバーが体調不良等を訴え、朝一番で病院へ受診することとした。仲間を心配しながらも、残りのメンバーで本日の活動となるロッククライミングに向かう。受診の結果、熱中症傾向の2名は自然の家で安静にすることとし、他の処置を終えた1名は、班に合流することとなった。

ロッククライミングが始まった。ビレイスクールを終えた班から、岩場に取り付く。高いところへの恐怖心と闘いながら、一人また一人と自分の目標に向かって岩を登っていく。先に挑戦を終えた仲間からは、チャレンジャーへ心強い応援が送られる。岩を登るのはチャレンジャー1人かもしれないが、支えてくれている仲間がいるから、安心してチャレンジすることができる。改めて仲間の存在の大きさを感じさせる活動となった。

クライミング後に子どもたちを待っていたのは、山盛りのフルーツである。思わず歓声が上がる。思う存分甘いフルーツに舌鼓を打ちながら、支え支えられたロッククライミングの体験を振り返る。仲間の支えや応援があったからこそ、自分の思い込んでいた限界から一步を踏み出すことができた。一人ひとりにとってチームの力を実感する学びの多い体験となったようである。

振り返り後は、ファイナルに向けて、福谷奥のテン場に移動する。ロッククライミングで消耗した体に鞭を打ち、班で励まし合いながら進む。ここまでくると、スタッフが積極的に介入することなく、班のメンバーだけで、進む方向を確かめ、自分たちでペースを作りながら進むことができる。各班順調にテン場に到着。上宇津根から移動してきた3班も無事に到着。明日はいよいよファイナルツアー。これまでに培ってきた班のメンバーの力で、朝起きてから全ての行動を自分たちで行い、自分たちの力で十種ヶ峰山頂をめざす。各班で行程の確認、タイムスケジュールの調整を話し合い、最後の大きな挑戦に向けて早めの就寝を心掛けた。



令和4年7月28日(木)

6日目

冒険・覚醒の日(責任と信頼、
実行力と協調性)

福谷奥→十種ヶ峰山頂→
方丈原/自然の家

【ファイナルツアー・ミーティング】

ここまでの5日間、グループとして成長してきた子どもたちのファイナルツアーが始まった。ファイナルツアーでは、班のスタッフは子どもたちから距離を取り、離れたところから見守る。子どもたちは、コースの締めくくりとして、仲間たちと力を合わせながら、これまでの知識と経験をフル動員して、十種ヶ峰山頂を経て、ゴールである十種ヶ峰青年自然の家または方丈原をめざす。

起床と同時に子どもたちのチャレンジが始まる。インストラクターの指示を待たずして、お互いに声をかけ合いながら朝の準備を進めていく姿に、これまでの5日間の蓄積が見え、逞しさを感じる。それぞれ、自分たちの力で朝のパッキングを終え、出発の時を迎える。

スタートの福谷池脇の細い道は要注意だ。それぞれに足の踏み場を一步一步確認しながら進む。全員が安全に通過できたら、まずは谷沿いを登り、作業小屋をめざす。高低差の少ない地形で道を見失いやすいため、地図とコンパスを駆使し、所々のテーピングも頼りにしながら、みんなで道を見つけ、歩みを進めていく。3つの班が作業小屋を越えて、林道の終点、十種ヶ峰につながる稜線の入口に13時着をめざし、順調に進んでいく。天候の急変が起こりやすい夏の山では、雷を警戒し、午後の遅い時間に山頂に到着することがないように、通過地点の時間制限を設けている。基本、子どもたちのチャレンジを見守るスタッフも、目標の十種ヶ峰登頂が叶うように必要な支援を行っていく。



ファイナルへの挑戦でいつも以上に気を遣う状況に加えて、この時期の暑さが、子どもたちを消耗させる。最後尾を進む3班は、メンバーのうち2名が熱中症気味ということで、ゆっくり時間をかけて進んだ。そのため、作業小屋到着が予定より大幅に遅れてしまう。現状を伝えた上で、子どもたちと話し合った結果、山頂へのアタックを取り止め、神角神社へのエスケープルートを進むことを決めた。

苦しい時こそ、いかに楽しく歩くかを、それぞれの班がこれまでの5日間で試行錯誤してきた。大きな声を出し合ったり、しりとりをしたり、歌を歌ったり。目の前の苦しい試練に対して、ただ耐えながら進むのか、工夫して意気揚々と進むのか、選択するのは自分たちだ。これは、山を歩くとときだけでなく、日常生活のあらゆる場面に通じる貴重な学びとなるはずである。

14時を過ぎたころ、山頂で待つ本部スタッフの耳に、元気な子どもたちの声が聞こえてきた。1、2、4班が次々に登頂してくる。満面の笑みで上がってくる子、道のりの険しさに涙を流す子、歓喜の声を上げる子。一人ひとりの表情がここまでの行程の価値を物語っている。しかし、どの子も疲れの中に「やり切った」という達成感に満ちた顔をしている。生憎の曇り模様ではあったが、360度見渡す限りの絶景が子どもたちの登頂を祝福していた。

水分補給をしたり、記念写真を撮ったりと、思い思いに班で時間を過ごした後、テン場をめざす。山頂がゴールではない。この後に待つ長い下りに、過去多くの班が苦しめられてきた。最後まで気を抜かず声を掛け合って楽しく歩きたい。それぞれの班が進む方向を確認した後、気合いを入れ直して下山を開始した。途中苦しいこともあったようだが、



無事に1、2班は自然の家キャンプ場、4班は方丈原に到着し、大きなチャレンジの1日を終えた。

一方、心配していた3班も元気そうに神角神社に下りてきた。体調面で心配されたが、途中合流した本部スタッフの支援も受け、しっかり休息をとったことで、回復したようだ。残りの行程をどう歩きたいか、ミーティングを挟んだことで、班全員が楽しそうに会話しながら笑顔で下りてきた。この班は、翌日ピークアタックに再挑戦することを選択した。早めに夕食、ミーティングを済ませ、次の日の朝の動きを確認した後、最後の挑戦に向けて早めに就寝する。班全員での登頂を、スタッフも含めみんなが願っている。



令和4年7月29日(金)	7日目	決意の日(達成感と自信)	1、2班：自然の家 3班：神角神社→十種ヶ峰山頂→自然の家 4班：方丈原→自然の家
【バックパッキング、クリーンナップ・ラストナイトミーティング】			



7日目。1週間を超える長期プログラムも残すところ2日間である。今日は自然の家のキャンプ場でクリーンナップをする日となる。1、2班はキャンプ場泊だったため、すぐにクリーンナップに取りかかる。4班は方丈原を经ち、この旅最後のバックパッキングでキャンプ場へ向かう。

一方、昨晚神角神社に宿泊した3班は朝5時前から活動を始め、前日に叶わなかった十種ヶ峰山頂をめざして、いつも以上に早いスタートを切る。子どもたち同士がお互いに声を掛け合って進む姿に、並々ならぬ気合いと決意を感じる。天気予報は晴れ。一時的な雨は心配されるものの、子どもたちのチャレンジを後押ししてくれる天候である。

早朝キャンプ場に戻ってきた4班を含め、その他の班は、これまでお世話になった装備のクリーンナップを進める。ザックやスパッツなどに付いた泥や汗などの汚れを落とすのだが、自分たちの汗が染みこんだザックのクリーンナップは一苦勞である。クリーンナップをしながら7日間の行程を振り返るとともに、感謝の気持ちをこめて、丁寧に進めていく。これらの装備は、来年度以降参加する子どもたちに受け継がれていく。こうして子どもたちのチャレンジをサポートする装備にまた一つ歴史が積み重ねられるのだ。

この間、順調に歩みを進めた3班は、見事十種ヶ峰の山頂に到着したようだ。登頂の喜びは仲間同士で共有できる分、何倍にもなる。昨日の苦勞を乗り越えての登頂だけに、山頂からの景色も輝いて見えたことだろう。

午後には待ちに待った入浴の時間。久しぶりの入浴に喜びが抑えられない。登頂を終えた3班も、無事キャンプ場に戻ってきたので、早速入



浴。心も体もさっぱりして、再びクリーンナップに奮闘する。

今日の夜ご飯はラストナイトということで、ピザ作りを行う。いつもは山の中で、できるだけ簡単な調理で済むメニューが多かったが、今日は野外炊事場でピザの生地作りから行い、火を熾した上で、窯焼きのピザに挑戦する。高温で一気に焼き上げるため、外はパリッと、中はもちもちの手作りピザが完成する。時間はかかるが、班の仲間と様々な話をしながら取り組む調理の行程もかけがえのない思い出となるだろう。子どもたちにとって大切なのは、場所や活動というよりも仲間と過ごすこの時間なのだと改めて感じさせられる。終わりの時は着実に迫っている。それを噛みしめながら、子どもたちは和やかで楽しい時間を過ごしているようであった。



食事の後は、ラストナイトミーティングである。どの班にも7日間の歴史がある。その歴史を振り返っていくと子どもたちは自然と、自分について、仲間について語り出す。一人ひとりが、仲間一人ひとりに感謝を伝える「サンクス」には、班のメンバーが辿ってきた道のりが凝縮されている。と同時に、仲間から伝えてもらった「ありがとう」が、日常に戻っていく自分の自信となり、新しい旅立ちを力強く後押ししてくれる。

中には、ファシリテーターが話をつなぐことなく、子どもたち同士がお互いの話に共感したり、新しい視点を提案したりしながら、ミーティングを進めていった班もあったようだ。自分にとって苦しい経験であったとしても、仲間に伝え、仲間からフィードバックを得ることで、過去の解釈が変わることがある。こうした話し合いができるチームへと成長する過程を経験したことも、今後の子どもたちの大きな力となってくれるはずだ。

このキャンプの体験が、変わりたいと願っている子どもたちの、なりたい自分に近づくための原動力になるだろう。と同時に、ありのままの自分を受け入れ、確かな自信を手に入れるきっかけになったと信じている。

令和4年7月30日(土) 8日目 新たなる旅立ちの日(自立と奉仕) 十種ヶ峰青少年自然の家
【個人ラン、閉会式】

最終日を迎え、子どもたちの表情からは寂しさの中にも誇らしさが感じられる。思えば、多少の雨はありつつも、終始天候に恵まれることの多かったプログラムだった。最終日の朝も、緑に囲まれ、清々しい気持ちのよい最後の朝を迎えることができた。



手早く朝食を済ませ、インストラクターが保護者との懇談をおこなっている間に、残りのクリーンナップに取りかかる。懇談では、8日間の出来事を保護者へと伝える。子どもたちの頑張り、成長、葛藤など、ずっと一緒に過ごしてきたからこそ見えた様々な姿を伝える中で、保護者は日常では想像もできなかった子どもたちの様子に驚きや感動を覚えたようである。きっと1週間以上も我が子と離れて過ごす経験も、保護者の方にとっては大きな挑戦であったに違いない。帰りの車の中で、家

に帰って、家族でどんな話が繰り広げられるのか、一人のスタッフとしてとても興味深いところである。

さあ、クリーンナップを終え、インストラクターが保護者との懇談を終えると、いよいよ最後のプログラム、個人ランである。8日間を共に過ごし、最高のチームに成長していった子どもたち。しかし、閉会式を終えると、それぞれがそれぞれの生活に帰っていくことになる。個人ランは、新しく始まる日常への旅立ちの儀式である。各個人がそれぞれ目標を設定し、その目標に向けて頑張る。人との競争ではなく、心の中の仲間を感じながら、自分自身に挑戦するマラソンである。

スタートして駐車場まで下ると、そこからは方丈原までひたすら上り道が続く。苦しくて歩いてしまうこともある。しかし、決して歩みを止めることはない。走ったり、歩いたり、自分にできる精一杯で前へ進み、ゴールをめざす。果てしなく感じられる上り坂にも終わりは来る。進んだ分だけ着実にゴールに近づくのだ。日常生活で困難にぶつかったときも、このことを胸に、自分の力で乗り越えていってくれるだろう。

一人、また一人とキャンプ場のゴールにたどり着く。その顔はやり切ったという充実感に満ちている。先にゴールした仲間は自然と仲間のゴールを待つ。まだゴールしていない仲間を全力で応援し、笑顔で迎える。自分を信じて待ってくれる仲間がいるって本当に素晴らしい。まぶしい笑顔がいっぱいの個人ランとなった。



閉会式では、「このキャンプで学んだことと、今後の生活に活かしていきたいこと」を一人ひとりが発表した。どの子も自分の言葉で心からの思いを伝えてくれた。数々の挑戦をし、困難を乗り越えてたどり着いた今の思いが、自然と言葉になっていたようだ。

一人の子が「初めて出会った人たちと1週間でこんなに自分の思いを伝え合えるようになるとは思わなかった」ということを発表したことが印象的だった。自分の思いを人に伝えることが苦手と聞いてただけに、みんなの前で自分の気持ちをきちんと言葉にして伝えられたことと、その子にとってのこのキャンプの意味や価値が伝わってきて、一スタッフとして、純粋に涙が出るほど嬉しい一幕だった。

チャレンジプログラムを終えた子どもたちが、ここから新しい一歩を踏み出す。困難を前に諦めなくなることもあるだろう。そんな時こそ、このキャンプをやり遂げた自分を思い出してほしい。それぞれの場所で頑張っている仲間を思い出してほしい。そのままの自分で、できることからちょっとずつ始めていこう。自分の人生の主人公は自分以外にはいない。「やらされている」ことも、自分から「やる」と決めるだけで、成長につながる楽しい挑戦になるはずだ。このキャンプに携わった全ての大人も、みんなのさらなる成長と輝かしい未来を心から応援している。

